

# 永保記事略

全一冊

上野市古文獻刊行会編  
A5判/定価八、八〇〇円

藤堂高虎は大阪の役のはじまる六年前の慶長十三年に、伊豫の今治二十万石から

伊賀十万石に封ぜられ、併せて伊勢にて十余万石を有することになり、津城を本城

とし、伊賀には上野に城代をおいた。もともと、上野は筒井定次二十万石の城下、

津は富田信包五万石の城下であり、高虎は違例の転封を命ぜられ、二つの城を持つ

ことになった。

上野城代ははじめは高虎の異母弟出雲高清であつたが、寛永十七年高清の死後、

伊賀の土豪出身である藤堂（本姓保出）采女元則がそれに任せられ、四代元杜の若

年のあいだ十年間（享保十六年——寛保二年）藤堂氏の一族である玄蕃良成がその

職にあつたほかは、幕末まで代々城代職を世襲した。

永保記事略は初代采女元則が城代職になつた寛永十七年から、四代采女元杜が目

出度く父祖の職に補任された寛保二年までの、自二年間のあいだの伊賀における政

治・経済・犯罪・藩主の御越國・宗教・社会・風俗・火事・天災地変・采女家の人事家事など凡てにわたるもの、『反故長持に在り』或は『一袋に入れて之れ有』

る各種の行事帳・觸帳・覚書帳・一件帳などにより編年・整理したものである。

編纂の時期は文政ごろと考えられるが、十八世紀半ばに編著された宗国史には「伊藩の古薄」にて「文具にす」「補ふ」というのがしばしばみられ「津藩の如きは未だ旧史を見ず」、「津藩また例推すべし」としているように、伊賀には、さきにあげた行事帳・觸帳・覚書帳・一件帳などにより編年・整理したものである。

また宗国史がその譜で、三代の藩主の行績を漢文體で記しているのに対し、永保記事略・廳事類編が當時の文体で記していること、また永保記事略・廳事類編が項目だけをあげているのに、宗国史はその内容を記していることなど、たがいに唇齒輔車の関係にある。

◆ 目 次 ◆

卷一 自寛永十七年十月  
至延宝四年十一月

卷二 自延宝五年正月  
至元禄四年十二月

卷三 自元禄五年正月  
至元禄十六年十二月

卷四 自元禄十七年正月  
至宝永五年十二月

卷五 自宝永六年正月  
至正徳五年十一月

卷六 自正徳六年正月  
至寛保八年十二月

卷七 自寛保九年正月  
至寛保十六年九月

卷八 自寛保十七年二月  
至寛保二年五月

卷九 拾遺自寛永十七年十月  
至寛保二十年五月

解説

## 永保記事略 第九

寛永十七辰十月

同年十八巳四月十八日

一御着座也

同年十月

一當秋御領國凶作ニ付御儉約被

仰出之

△寛永十八巳五月

△是迄御飼置被成ハ鷹を伊賀之山中へ御放させ被成鷹

之飼差井犬环も御減被 仰出ハ事

一吉利支丹彌致穿鑿ハ様井他國へ參有付ハ者構ひ申間  
敷ハ義且獨旅人今迄宿をかさすハ所以後一人にも宿

をかしひ様トミ諸事不<sup>(レ)</sup>嫡<sup>(シテ)</sup>之様可申付旨從

公儀被 仰出ハ趣を以御書付<sup>而</sup>被 仰出ハ事

△本書ノ承書可考也

## 刊行によせて

# 永保記事略の刊行に際して

上野市長 奥瀬平七郎

上野市に残されている歴史的資料を、正確に原文のまま復元して、誰にでも容易によみうる活字本を出したい。このことは長い間、私の胸中に秘めていた希望の一つであった。

幸い上野市の図書館には、封建時代から幕末にかけての豊富な歴史資料が蔵されている。この徳川三百年の政経の記録は、大切に保存されていて、郷土史研究家のグループによって、資料的に活用されている。しかし、万一大火災・その他、不時の災厄にあつた時のことを考えると、とり返しのつかない損失を悔まなければなるまい。印刷本にして全国に版布すれば、永久に安全に研究資料を保存することができる。同時に、出版物が、市内にも大量に販売されるから、若い世代の市民の郷土史に対する興味を誘発することになる。要するに古典資料の開放と大衆化は、資料保存の永久化と歴史研究の奨励のために、もつとも効果的な方法だと思われる。

上野市立図書館は、もと藤堂藩の伊賀藩校、崇広堂に置かれているが、藩校所蔵の文書をほとんどそのまま引き継いで所有しており、武家文化研

## 発刊にことよせて

文学博士 藤 堂 明 保

伊賀の城代家老であつた保田采女の日記が、このほど日のめを見ることになった。当事者のご苦心の賜物である。

私の家は、藤堂玄蕃の筋で、武備調練をあずかった武骨な家柄だから、味のある記録は何ひとつ残っていない。秀吉の弟であつた大納言秀次の「朱印状」とか、秀吉検地のあと、ぐつと額面の下がつた「知行目録」とかといった形式的な文書が残つてゐるだけで、残念ながら内容のあるものが見あたらないのだ。ところが保田采女のほうは、同じものである。

## 出版に際して

『永保記事略』は、寛永十七年から、寛保二年にいたる百二年間にわたる伊賀における政治、経済、犯罪、藩主の御越国、宗教、社会、風俗、火事、天災地変、采女家の人事家事など、すべてにわたる記録を、各種の史料によつて編集、整理されたものである。

東海道十五国の中としての伊賀の地は、周知のとおりたびたび日本史に登場する要害の地である。

究の宝庫もある。その所蔵本の中から、とくに重要な資料を選んで、年々復元刊行する豫定であるから、十年後には、相当大きな効果を期待することができると思う。

その最初の出版物が、表題の『永保記事略』である。寛永一寛保期の藩政の記録であつて、当時の行政を通じて、武士・庶民・百姓の生活・文化・その哀歎まで読みとり得る好資料である。次回には『宗国史』つづいて『廳事類編』の刊行を予定している。

幸いなことに、この事業を推進していくための原動力となるスタッフに、上野市は大変恵まれているのである。故村治円治郎氏（宗国史の刊行責任者）を中心に数十年にわたつて結成された郷土

史研究会の会員の方々がそれである。

優秀な資料群と、才識豊かな郷土史研究グループの編さん力——この両者の結合は、上野市の文化面に、必ず大きな影響をもたらすであろうことを確信するものである。この資料が、全国的に活用されることを祈る次第である。

家老職でも行政を担当した実力者だから、瑣細なメモの中にも、当時の社会や権力支配の内情を伺わせるものが数多くあるはずだ。これによつて、郷土史の隠れた部分が明らかになるだろう。

江戸時代の玄蕃家系十五代のうち、とくにその後半には、保田家からとついできた嫁御が三人もいる。とするとかなり縁の深い姫戚どうしだといふことになる。「日記」によつて祖先の旧悪が露呈することもあるだろうが、それもまたおもしろいではないか。

その伊賀の国についての精緻をきわめた記録、史料は、地方史の研究者のみならず、日本史研究者、あるいは思想史、宗教史、政治史の研究にとっては必携の資料であろう。

このたび、伊賀上野市のご厚意により、小社において、本書を刊行の運びとなつたことを無上の喜びとする次第である。

昭和四九年十月

株式会社 同朋舎